

二〇一八年読書アンケート

——二〇一八年中にお読みになった書物のうち、とくに興味を感じられたものを、五点以内で挙げていただけますよう、おねがいいたします。

編集部

January-February 2019 MISUZU

山内昌之

(国際関係史)

- 1 大稔哲也『エジプト 死者の街と聖墓参詣——ムスリムと非ムスリムのエジプト社会史』山川出版社、二〇一八年
- 2 大川玲子『クルアーン——神の言葉を誰が聞くのか』慶應義塾大学出版会、二〇一八年
- 3 池上俊一『フィレンツェ——比類なき文化都市の歴史』岩波新書、二〇一八年
- 4 水島治郎・君塚直隆編著『現代世界の陛下たち——デモクラシーと王室・皇室』ミネルヴァ書房、二〇一八年
- 5 Wang Ke (王柯)『The East Turkestan: Independence Movement 1930s-1940s』CUHK Press, 2018

二〇一八年は専門から離れて歴史書を読む機会が多かった。

1はカイロ東北部の墓地区を対象に社会史や歴史人類学の方法によって、聖女、障がい者、狂者などを含めて珍しい逸話や奇跡譚なども扱いながら、エジプトのムスリムと非ム

スリムの接点を大きなスケールで浮かび上がらせた力作である。

2は、一四〇〇年以上にわたって活力を維持しているイスラームの聖典クルアーンについて、分かりやすく明快な文章で説いている。翻訳を通して異文化とめぐりあうクルアーンの多面的な受容プロセスについて、日本の例にも触れている。生の言葉による「説得」とか、「説得」から「共有」へ、など魅力的な枠組みでクルアーンを分析する筆致は説得的だ。

3は、次々に意欲作を出す著者がローマの植民市として出発したフィレンツェの都市史と中世史の再構成に取り組んだ書物。メディチ家とダンテ、広場と街路など多面的な組み合わせによって日本人も一度は訪れたいイタリアの都会を分析した。これからのイタリアとフィレンツェ旅行には必携の案内書となるだろう。

4は、今上天皇退位と新天皇即位を機に欧州各国やタイの王室や国王の在り方をデモクラシーや憲法との関連で議論した7人の論集。トクヴィルと昭和天皇が同じ書物のなかで論じられるのも珍しいのではないか。

5は、中国の新疆ウイグル自治区にかつて存在した東トルキスタン共和国を総合的に扱った研究書。チベットと並んで民族の自治や信教の自由が風前のともしびとなっている現在のウイグルの出発点を知る上でも重要な書物である。かつて日本語で出版された書物を補訂し英文で世界の読者に中国の民族問題を幅広く問いかけている。

2019年2月1日発行（1月除く毎月1日発行）

み

misuzu
january-february 2019
no.678

編集人 中林久志 発行所 株式会社みすず書房
〒113-0033 東京都文京区本郷 2-20-7 印刷 中央精版印刷
© MISUZU SHOBO 2019 printed in Japan

二〇一九年二月一日発行・（一月除く）毎月一日発行

みすず 第六十一巻 第一号

定価三二四円 本体三〇〇円



読書アンケート特集

1/2

す

ず